

リカード『原理』第二版の一コピーにおける乱丁・落丁について

竹永 進

すでに著作権の切れている古い書籍の画像ファイルをインターネット上からまるごとダウンロードすることは今日では容易に可能である。リカードの貨幣制度改革論について調べていた時、その主著である『経済学および課税の原理』（以下『原理』と略称）の三つの版（それぞれ、1817年、1819年、1821年刊）を個別にダウンロードして、第二版の第27章「貨幣と銀行について」をこの章に対応する初版の第25章と比較してみようとした。第二版のこの章には、その3年前に刊行された『安定的で経済的な通貨についての諸提案』（以下『諸提案』と略称）から7ページにわたる長文の引用がなされており、このため初版とは章の構造が大きく変化している。スラッフアの全集版においても編者の注記を参照すれば初版から第二版へと変更がなされていることは分かるが、実際に二つの版を対比してこの点を確認しようとしたのである。このとき偶然に、第二版の第25章の途中から第27章の始めの部分に相当する16ページ分のテキストの内容がその前後と連続しておらず、しかも、組版状態もその前後とは異なっていることを発見した。ただしページの番号には乱れはなく前後を通じて一貫している。この16ページは第二版の433ページから448ページに相当する。この状態を視覚的に確認するために、本稿70ページに432と433ページ、448と449ページを左右に対比的に掲げておく。

449ページの左にあるページは新しい章のはじまりであり、そのナンバーとタイトルが上部に書かれているためページ数が示されていないが、前後の関係からこれが448ページであることは明らかである。一見して分かるように、これら二組の左右のページの内容は連続していない。このデジタル画像は、その各ページの右下に記されているようにグーグルによって作成されたものである。左右のページをよく比較してみれば組版状態が異なっていることは容易に見て取れる。このような変則的な状態がこのデジタル画像版で生じた理由として考えられるのは、グーグルの担当部署でデジタル化の作業をしている時に、433ページから448ページまでの16ページ分について担当者が誤ってリカードの『原理』第二版とは異なる書籍のデジタル画像を取り込んだこと、あるいは、デジタル画像の作成は適切に行われたがグーグルがデジタル化のために使用した『原理』第二版のコピーそのものにこのような組版上の変則性が存在していたこと、このいずれかである。このデジタル版では、『原理』の序文の前の空白ページに、デジタル化の元となったコピーを所蔵する機関の捺印が押されているのが見える（本稿71ページ掲載の当該ページの関連箇所のみを切り取った画像を参照）。

上下二つの押印にはそれぞれ、Hofbibliothek、Kaiserliche Koenigliche Hofbibliothek Wienと記されており、第一次大戦時まで存在していたウィーンの帝国図書館に所蔵されていたコピーであると思われたので、現在のオーストリア国立図書館（Österreichische Nationalbibliothek）

in England, when she might perhaps have bought it at the much lower natural price of some other country. It occasions then a disadvantageous distribution of the general capital, which falls chiefly on the country bound by its treaty to buy in the least productive market; but it gives no advantage to the seller on account of any supposed monopoly, for he is prevented by the competition of his own countrymen from selling his goods above their natural price; at which he would sell them, whether he exported them to France, Spain, or the West Indies, or sold them for home consumption.

In what then does the advantage of the stipulation in the treaty consist? It consists in this: these particular goods could not have been made in England for exportation, but for the privilege which she alone had of serving this particular market; for the competition of that country, where the natural price was lower, would have deprived her of all chance of selling those commodities. This, however, would have been of little importance, if England were quite secure that she could sell to the same amount any other goods which she might fabricate, either in the French market, or with equal advantage in any other. The object which England has in view, is, for example, to buy a quantity of French

Digitized by Google

CHAPTER XXVIII.

ON THE COMPARATIVE VALUE OF
GOLD, CORN, AND LABOUR,
IN RICH AND POOR COUNTRIES.

"GOLD and silver, like all other commodities," says Adam Smith, "naturally seek the market where the best price is given for them; and the best price is commonly given for every thing in the country which can best afford it. Labour, it must be remembered, is the ultimate price which is paid for every thing; and in countries where labour is equally well rewarded, the money price of labour will be in proportion to that of the subsistence of the labourer. But gold and silver will naturally exchange for a greater quantity of subsistence in a rich than in a poor country; in a country which abounds with subsistence, than in one which is but indifferently supplied with it."

But corn is a commodity, as well as gold, silver, and other things; if all commodities, therefore, have a high exchangeable value in a rich country, corn must not be excepted; and hence we might correctly say, that corn exchanged for a great deal of money, because it was dear, and that money, too,

Digitized by Google

pensive medium, and enables the country, without loss to any individual, to exchange all the gold which it before used for this purpose, for raw materials, utensils, and food; by the use of which, both its wealth and its enjoyments are increased.

In a national point of view, it is of no importance whether the issuers of this well regulated paper money be the Government or a Bank, it will, on the whole, be equally productive of riches, whether it be issued by one or by the other; but it is not so with respect to the interest of individuals. In a country where the market rate of interest is 7 per cent., and where the State requires for a particular expense 70,000*l.* per annum, it is a question of importance to the individuals of that country, whether they must be taxed to pay this 70,000*l.* per annum, or whether they could raise it without taxes. Suppose that a million of money should be required to fit out an expedition. If the State issued a million of paper, and displaced a million of coin, the expedition would be fitted out without any charge to the people; but if a Bank issued a million of paper, and lent it to Government at 7 per cent., thereby displacing a million of coin, the country would be charged with a continual tax of 70,000*l.* per annum: the people would pay the tax, the Bank would receive it, and the society would in either case be as wealthy as before; the expedition would have been really fitted out by the improvement of our

F F

Digitized by Google

ON CURRENCY AND BANKS. 449

intrinsic value, yet, by limiting its quantity, its value in exchange is as great as an equal denomination of coin, or of bullion in that coin. On the same principle too, namely, by a limitation of its quantity, a debased coin would circulate at the value it should bear, if it were of the legal weight and fineness, not at the value of the quantity of metal which it actually contained. In the history of the British coinage, we find accordingly that the currency was never depreciated in the same proportion that it was debased; the reason of which was, that it never was multiplied in proportion to its diminished intrinsic value*.

There is no point more important in issuing paper money than to be fully impressed with the effects which follow from the principle of limitation of quantity. It will scarcely be believed fifty years hence, that Bank directors and ministers gravely contended in our times, both in parliament, and before committees of parliament, that the issues of notes by the Bank of England, unchecked by any power in the holders of such notes, to demand in exchange either specie, or bullion, had not, nor could have any

* Whatever I say of gold coin, is equally applicable to silver coin; but it is not necessary to mention both on every occasion.

G G

Digitized by Google



G. WOODFALL, PRINTER, ANGEL-COURT, SKINNER-STREET, LONDON.

Digitized by Google

のサイト (<https://www.onb.ac.at>) にアクセスしてリカード『原理』第二版(1819年)を検索したところ、この書籍の所蔵情報とともにそのデジタル画像も同サイトにアップされていた。さっそく本稿の前ページと本ページに画像を示した5つのページを見てみたところ、グーグルのデジタル画像とまったく同一であった。これで、グーグルがこの図書館に所蔵されているコピーからデジタル版を作成してインターネット上に公開したことは確実となった。しかし、この図書館のサイトにアップされている『原理』第二版のデジタル版がこの図書館が独自に作成したものなのか、あるいは、グーグルがすでに作成したデジタル版をこの図書館が後でそのままそのサイトにアップしているだけなのかは、外部からは確かめられない。もし、後者であれば、グーグルによるデジ

タル化作業の過程で生じたかもしれないミス(433ページから448ページが『原理』第二版とは異なる他の書籍のものと取り替えられたこと)がここにも再現しているかもしれない。その場合、問題の変則的な組版は19世紀初頭のロンドンにおけるリカードの書籍の制作過程⁽¹⁾とは無関係となる。問題が同図書館所蔵のオリジナル・コピー自体に由来するのかどうかを確認するには、このコピーを直接手にとって確かめるしかない。そこで、同館に所蔵されているコピーそのものの上記のような変則性があるかどうかをメールで問い合わせたところ、司書と思われる担当者からすぐに‘I already looked at the pages and I have to confirm that these “abnormal” states exist originally’、という回答があった(2017年8月01日付け)。これによって、リカードの『原理』第二版のひとつのコピーにたまたま見つかった組版上の変則性が、この版の作成過程自体において生じたものであることが確定した。

同様の乱れが他の部分にもあるかも知れないと思って全体を調べて見たが、第27章の前後以外に問題はなかった。そこで、こうした乱れはリカードが1818年の11月から翌年1月にかけて行った第二版のための改訂作業における混乱と関連しているのではないかと思われた。というのは、リカードが1818年末に『原理』のフランス語版に含まれるセーの地代理論についての批判的な注への回答を追加してこれを第二版に挿入した(518ページ(I/413))⁽²⁾ことを除くと、こ

(1) 上掲の画像ページの最下部には印刷業者名G [eorge] Woodfallも記されており、おそらく版元のJohn Murrayからの委託によってこの業者がリカードの著作を印刷したと思われる。しかし今となってはこの業者の版元との関係やその業態については調べようもない。

(2) この件についてはEJHET, Vol. 24, no.1 (2017年2月) 掲載のChristophe Depoortèreの論文‘Say’s involvement in the 1819 French edition of Ricardo’s *Principles* and the issue of rent’を参照。また関連して、1818年12月12日付けのミル宛ての手紙(VII/361)、同年12月20日付けのトラワ宛ての手紙(VII/370)、翌年1月3日付けのトラワ宛ての手紙(VIII/4)、も参照。

の混乱は主として『諸提案』についての書評を執筆して*Edinburgh Review*の12月号にこれを掲載したマカロックがこの月に『原理』第二版のための改訂過程へ介入したことによってもたらされたからであり、またこの介入はもっぱら第27章に関連するものであったからである。

マカロックは『原理』初版についての書評を1818年8月に出た*Edinburgh Review*の同年6月号に掲載した。この書評によって初版の残部払底が加速され、リカードはわずか3か月後の11月には版元のマリから第二版の準備を要請された。「11月17日に、リカードはマリから第二版を準備するようにとの要求をうけ〔同18日付けのリカードのマリ宛の手紙 (VII/322)。元のマリからの手紙は残っていない。〕、一週間以内に彼はこの版本を印刷に付する準備を終えた〔11月23日付けのリカードのマリ宛ての手紙 (VII/331)〕。修正の入った〔初版〕本をマリに送付するにあたって、彼は「少数のごく些細な変更」〔*ibid.*〕が加えられていることを述べた。」(Sraffa's 'Introduction', I/1) その二週間後、マカロックは、『諸提案』の書評原稿を書き終えた直後と思われる12月6日付けのリカードに宛てた手紙で、「通貨と銀行にかんする章のはじめの部分を拡大されるべきだと思います——3-4ページのスペースで、「経済的通貨」にかんするあなたのもっともすぐれたパンフレットの最初の部分の内容を書かれればよいでしょう」(VII/353)と勧告している。また彼は同じ手紙の中でこれ以外にも何点かにわたって第二版のための修正ないし加筆の案を述べている(「制限の原理にかんして、すこし拡大されるのがよろしかろう」(*ibid.*)というのもそのひとつであった。この勧告は実際に取り入れられた。Cf. I/353-4.)。このときリカードすでに2週間前に『原理』第二版の準備を終えて、訂正個所の指示の入った初版のコピーをマリに送付していた。しかし彼はマカロックのこの勧告を容れて、版元のマリに『諸提案』からの抜粋の挿入を含む第二版のための追加の訂正指示を含む手紙を送った。これは上記のマカロックからの手紙を受けとってからしばらく後のことだったのであろう。しかしこの手紙は*Works*には収録されていない。

おそらくこの手紙に対してマリからの反応がなかったからであろう、リカードは翌19年1月3日付けのマリ宛の手紙でもあらためてこの二度目の訂正の受諾を要請している：「*Edinburgh Review*の次の号で私の『経済的通貨』にかんするパンフレットがとりあげられ、そのなかで私の推奨した案が好意的に語られることになるでしょう〔1818年12月号はこのときにはすでに刊行されていた。リカードはマカロックから書評論文の抜き刷りを受け取っていたはずである。Cf. 12月27日付けのマカロックの手紙。〕。私の著作のこんどの版に挿入するようにしたいと私が、というよりもむしろマカロック氏が望んだというのはあの案でした。この問題については以前にいつかあなたに手紙〔この手紙はない。Sraffa's note 3.〕を書き、もしそうした方がよいと思われるなら挿入すべきページを指示しておきました。[・・・]このことをお知らせして、私の以前のパンフレットの指示されたページを挿入するのかわらないのかご勘案に供するのがよいと思った次第です。」(VIII/5)。『原理』初版のコピーの第25章にあらたな書きくわえを行って送るのではなく、マリが手許に持っていた『諸提案』のコピーからその一部を引用してもらうことにしたのは、このような事情からであったと思われる。

この10日後の1月13日にはリカードはすでに校正を行っていた(同日付けのミル宛ての手紙。「マリが送ってよこした下刷り (sheets) を校正した」(VIII/7)。この「下刷り」が1月3日になっ

てから再要請した訂正まで入れたものだったのかどうかは不明。)。その後リカードは、彼が議会入りした翌日の2月27日に第二版が出版されるまでのあいだ、校正について手紙ではこれ以上にも言っていない。1月中旬で校正は終わったということであろうか。第二版が実際に出るまで六週間強を要しているがこれは通常の長さなのか、あるいは、何らかの問題が生じて遅延したためなのか。ちなみにリカードが初版の校正を終えたのは1817年3月26日で、印刷過程の遅延についての彼の不満の表明にもかかわらず、実際の刊行はその約三週間後の4月19日であった (I/xix.)。

おそらく『原理』第二版準備の最終段階におけるこのような混乱が、第27章前後に見られる乱丁の原因になったのではないかと思われた。このことと関係があるかどうか不明だが、スラッファは*Works*第I巻末の『原理』各版の対応ページ一覧表 (I/443-7) で、特に理由を示すことなく第二版だけは取り上げていない。また、この巻のはじめに付されている『原理』各版についての解説を含む‘Introduction’では、第二版の準備過程でこのような問題 (12月に入ってからマカロックの働きかけによって、リカードが一旦訂正指示を出してからかなり後になって再度長大な引用文の挿入を含む訂正をマリンに依頼したこと) が存在したことについて、スラッファは何も述べていない。

このような事情に鑑み、首都圏を中心として日本国内各地の大学図書館などに所蔵されている可能な限り多くの『原理』第二版のコピーを実際に閲覧するとともに、グーグル以外のサイトでも同書のデジタルファイルを探索してみた。大学図書館と国会図書館で活字印刷コピー、そしてBritish Libraryをはじめとするロンドンの大学図書館・公的機関およびG. Woodfall (London) という有料デジタル書籍閲覧サービスからのオンラインコピーにもあたってみた。最初のグーグルのものを含めて全体で44のコピーを逐一調査したことになるが、その限りで次のような結果を得た。第二版全体についてのある程度確かな状況が判明したと思われる。

乱丁が確認されたのは、グーグルからオンラインにアップされているもののみで、この一冊はまったくの例外であった。これ以外のすべてのコピーには同様の乱丁は見られなかった。例外的に一部だけこのようなものが作られたのか、あるいはミスに気づかず何部か印刷されたのか、また、問題の一部はおそらく間違いなく販売されたと考えられるが、他にも販売されたコピーがあったのか、またその部数がどれだけであったのか、これらのことについては44という少数の例の調査からは分からない。しかし、日本に現存する1819年刊行と銘打った30冊以上の中に同様の乱丁を含むものがまったくなかったことからすると、仮に問題の一部以外に市場に出回った部数があったとしてもそれはごくわずかでしかなかったと思われる。たまたまこれらごく少数数のうちの一部がグーグルのデジタル化に引っかかったということであろう。

上記のWienの図書館に所蔵されていたコピーのデジタル版では、p.432 (Ch. XXVの6ページ目 [I/341の下から2行目]) まで、および、p.449 (Ch. XXVIIの3ページ目 [I/353の半ば]) 以後はまったく問題はない。調査した他のすべてのコピーと完全に同一である。だが、Wienのコピーではp.433-448⁽³⁾の部分に、他のコピーではp.460の下から6行目 [I/361の上から8行目] (の単語の途中。p.447から始まるCh. XXVIIの14ページ目) からp.479の上から4行目 [I/373の下から10行目] (Ch. XXVIIIの2ページ目。句読点はやや異なる) までに相当するテ

クストの内容が入っている（この部分は前後とは組版状態が異なり、やや密に組まれており1ページが31行からなる）。これは1ページ29行で組まれている第二版のこの前後の部分の約18⅓ページ分に相当する。このため、他のコピーの対応部分p.433-448（Ch. XXVの最後の7ページ、Ch. XXVI全体の7ページ、Ch. XXVIIのはじめの2ページ。計16ページ [I/341の下から2行目-I/353の半ば]）がグーグルのデジタル版には含まれていない。反対に、グーグルのデジタル版ではp.460の下から6行目からp.479の上から4行目までのテキストが二回繰り返して含まれることになっている。

この16ページの混乱を含むGoogleのデジタル画像版を見て、これは第二版を準備する過程で発生したのではないかと考え、上記のように同版の他のコピーにも同様の混乱があるかをどうか調査してみたのであるが、結果は予期に反するものであった。そこで念のためと思い、筆者の所属する大東文化大学の図書館に所蔵されている初版と第三版の現物およびオンラインで入手したこれら両版のデジタル画像の該当ページを照合してみたところ、何と誤って入っていた上記16ページは第三版のもの（まったく同じページ数の入ったp.433-448）であった。したがって、これまでに調べた第二版のうちの一つだけに含まれていた変則的な組版は、第二版の準備過程で生じたのではなく、第三版の準備過程でこの版のなかのFFと番号の打たれた一全紙分が第二版の同じ番号の全紙と入れ替わったために生じたものであり、第二版の準備過程とは無関係であるらしいと判断される。第三版の準備過程が始まる時点まで第二版用のステロ版（stereotype）が保存されていて、第三版制作の過程でこのステロ版が誤って使用され、これに新たに制作された第三版用のステロ版の一部が紛れ込んだために、上記のような乱丁・落丁を含むように見える「第二版」が作成されたのだろうか。だがさらに別の疑問も残る。第三版用として作成された30を超える全紙のうち、なぜ、第27章の中の『諸提案』からの長い引用のすぐ後から始まるFFだけが、第二版用の他の全紙のあいだに紛れ込んだのだろうか。それは偶然だったのか、あるいは、このような「ハプニング」は、最初に見たような、第二版の準備過程にマカロックがこの長い引用の提案を主体とする介入をしたことによって生じた混乱と、何らかの関係があったのだろうか。Wienの図書館に所蔵されているコピーに含まれるのと同じ組版上の変則を含む他のコピーが将来発見されることがあれば、これらの疑問を解くための何らかの手がかりが得られるかもしれない。

(3) 16ページ分。『原理』はどの版もOctavo版である [cf. VII/383, note3] からこれは全紙一葉分に相当する。それぞれの全紙から作られる16ページの最初のページの下にはその全紙の番号がアルファベットでA,B,C…AA,BB,CCなどと記されている。先に左右並べて示した4ページのうちの右側の2ページの番号は433と449であるがそれぞれの下にはFFとGGという記号が印刷されている。これは433ページ目が28番目の全紙の始まり（ $16 \times 27 + 1 = 433$ ）であることを、また449ページ目が同じく29番目の始まり（ $16 \times 28 + 1 = 449$ ）であることを示している。